はじめに

東洋大学国際哲学センター長
河本　英夫

2018 年 6 月 14 日に東大からの招聘で来日していたマルクス・ガブリエル氏を白山にお招きして、シンポジウムを企画した。要するに東大の出してくれた経費に便乗して、国際哲学センターでも企画を実行したのである。そのさいのシンポの発表草稿やリライト原稿さらにいくつかの論考を加えて、本別冊はでき上がっている。

メイヤスーやガブリエルの議論の基調となるのは、「偶然性」の扱いである。そしてそれが知の形成にとってどのような場面で有効に機能していくのか、またどのようにして知そのものの形成が開始されるのかをめぐって、多くの選択肢があり、可能性がある。

たとえば何かが偶然に出現するとき、その出現するものに主観性そのものが巻き込まれていくのであれば、その何かを主観性が認識する、ということに留まることはできない。このとき主観に対置されるかたちで「実在」を捉えることはできない。あるいは対象が変化し続けていて、それの行き先も予期される結果も見通せないときにも、認識は対象を捉えることはできない。ここに「新実在論」と呼ばれる広範な構想の可能性が出てくる。

無限の問題を扱うさいにも、主観性は主観性に留まることはできない。無限なものは、どのような存在なのかという問いに、哲学の既存の道具立てで答えることは容易ではない。あるいは環境は、そもそも認識の主体を取り巻いているのだから、それじたいは認識の対象ではない。認識がそこで起きている場所は、認識の対象になりえないのである。

こうした問題を含めて、課題が山積している領域をあらためて明るみに出してくれたことが彼らの成果でもある。多くの構想の可能性をもとめて、今回の別冊を編んでみることにした。